

第26回新潟画像医学研究会

日 時 平成3年11月9日(土)  
午後2時より  
会 場 新潟大学医学部  
大講義室

I. 一 般 演 題

1) 頭蓋骨, 頭蓋内転移を示した悪性胸腺腫の  
1例

桑原 悟郎・西原真美子  
小田 純一 (新潟大学放射線科)  
岡本浩一郎・登木口 進 (新潟大学 歯科)  
伊藤 寿介 (放射線科)  
中川 忠・田村 享 (新潟大学脳神経)  
外科

頭蓋内転移をきたした悪性胸腺腫の一例を報告した。症例は肝転移, 胸膜播種をともなう悪性胸腺腫と診断されている60才の女性で, 初診時より7年後に左片麻痺にて発症した。CT, MRI にて右前頭部に出血を伴う腫瘍が認められ, 手術的に硬膜, 骨に浸潤する脳実質外腫瘍が確認されている。

胸腺腫の転移は1~15%に認められると報告されているが, 頭蓋内転移はきわめて希で現在まで17例の報告が認められるのみである。脳実質への転移, 硬膜転移, 癌性髄膜炎が報告されており, 転移経路としては(1)血行性, (2)胸椎レベルの硬膜へ直接浸潤し, 髄液を介して播種する, の2経路が想定される。

2) 興味ある乳児頭蓋骨腫瘍の1例

小林 勉・外山 孚  
川口 正・山本 潔 (長岡赤十字病院)  
増田 浩 (脳神経外科)

我々は比較的稀な, 頭蓋骨に発生した aneurysmal bone cyst を経験したので報告する。症例は11ヶ月男児。出生1ヶ月より左頭頂部の腫瘍に気付かれ来院。来院時左頭頂部に5×5cmの固い表面平滑な皮下腫瘍を認め, 頭部 X-P にて soap bubble 様の骨欠損像, CT にて内板の一部欠損を認めた。MRI では, T<sub>1</sub>-WI にて hypointense, T<sub>2</sub>-WI にて hyper-intense lesion として認められ, Angiography では avascular mass の所見であった。以上より, ABC を疑い, 外科的に切除術施行し, 術中, xanthochromic な液を含む古い血液を認めた。これまでの報告では, 頭部 ABC の乳児発生例はほと

んどなく, MRI 上の所見についても稀といえる。MRI は, 骨病変の描出は不良なものの, 内容物の性状から, 1969年 Dabaska が報告した stage 分類と考えあわせ, 有用な情報を得られるのではないかと考える。今後, そのような報告例が期待され, ABC の病像についてより深い考察がなされると考える。

3) 間歇性眼球突出の1例

田村 彰・小出 章 (厚生連中央総合)  
青木 廣市 (病院脳神経外科)

間歇性眼球突出はその原因の90%が静脈瘤であるとされている。私たちは, 最近典型的な一症例を経験したので報告する。

症例は61才女性。2年ほど前から, うつむいた姿勢や腹臥位で右眼に眼球突出が起こることに気づいた。

通常の背臥位での CT で, 眼窩内に特に異常を認めず, 腹臥位の CT で右眼窩外側に mass が出現し眼球突出が起こってくるのがわかった。診断は CT 上, 眼窩内静脈瘤と思われたが, 静脈撮影では静脈瘤を描出することはできなかった。

眼窩内静脈瘤の手術法に関しては, いくつかの報告が見られるが, いずれも術後に視力低下や外眼筋麻痺などの合併症をおこしやすく, 手術例は少ないのが現状である。視力障害や眼痛などのない症例では, 保存的治療を原則としている報告が多い。

4) 頸動脈バルーン閉塞試験における <sup>99m</sup>Tc-HM-PAO SPECT による CBF モニタリングの有用性

西巻 啓一・小池 哲雄  
竹内 茂和・伊藤 靖 (新潟大学脳研究所)  
藤井 幸彦・田中 隆一 (脳神経外科)  
佐々木 修・小泉 孝幸 (桑名病院脳神経)  
外科

一時的・永久的を問わず頸動脈などの脳主幹動脈閉塞を要する病態は少なくないが, その時の脳血流 (CBF) 低下の評価法には未だ確実なものはない。我々は, 従来よりの Balloon 閉塞試験に, <sup>99m</sup>Tc-HM-PAO SPECT による CBF 測定を併用した。対象は大動脈瘤1, 頸部~脳動脈瘤4, 頸部腫瘍2, 頸動脈狭窄1の8例であった。従来通りに, 経大腿動脈的な Balloon catheter による30分間の閉塞試験中神経学的・電気生理学的検査を行い, それに加えて閉塞解除5分前の HM-PAO の静